

百日の後

坂上弘

坂
上
弘

百日の後

昭和四十七年四月二十日第一刷発行

著者 坂上弘

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 東京(03) 九四五―一一一(大代表)

振替 東京 三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定価 七八〇円

0093-125752-2253 (0) (文1)

© Hiroshi Sakagami 1972 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

目次

本町通り三丁目

5

おばさん

43

農家

73

弔辞

111

百日の後

147

遅い帰りの道で

175

あとがき

239

カ
バ
ー

イ
ラ
ス
ト

坪
内
祝
義

装
幀

田
中
一
光

百日の後

本町通り三丁目

本町通り三丁目。このなんの変哲もない町名が僕の出発の地だった。十五年前——考えてみると随分多くの人々に面倒をかけたものだ。

しかしこんなことを言うのは何も罪ほろぼしのためではない。突然以前のことともう絶対に戻ってこないという確信に悩まされることがある。ふと指をしゃぶったときの、唾液の臭いのようなものが鼻を掠め、アッと思うと同時に、血液が逆流するような、そんな衝動を覚えることがある。そういうふうにして憶い出されるものは、きまって二つか三つの臭いとか味とかに限られている。そしてそれらもいつの間にか何の臭いや味だったのかいくら考えても全く覚えていないという状態になってしまう。

こんな失望は、僕が父や母の生き方をきらって家を出たあの頃からはじまったと思ったくなるのだ。

アパートは都電通りから入った住宅街の中にあり、路地には石炭殻が敷きつめてあつ

た。辺りは殆どが小ぢんまりした門と生垣のある中流家庭だった。閑静な袋小路のいちばん奥にある二階建のアパートの玄関には、女名のばかに大きな表札がかかっていた。

部屋は二階に全部で四間あって、色白で陽気な奥さんのいる共稼ぎ夫婦と、帽子のデザイナーをやっているという姉妹と、大学の女子学生が同居人だった。階下に炊事場と便所があり、でっぶり肥った家主のHさんが住んでいた。

最初の日の翌朝、窓を開けると目の前に柿の木があった。細い裏庭にはその瘦せた木が一本あるだけで土は湿った感じがした。きっと陽も当たらないのだろう。アパートというよりは普通の家の改築にちかいその家の感じが、僕をほっとさせたことは事実だ。二階の手すりのない窓や壁などはよくみると安普請らしくモルタルがこわれかかって板がみえていた。……僕は溜息がでた。自分の中でついに当り前でないことがおこってしまったのだ。この新しい暮らしは果して本当に自分の欲求によつてはじまったことなのだろうか。……：そうやってぼんやりしているときに一階にある共同便所の戸を誰かが勢いよく開ける音かして僕はアアッと思わず声をだした。前日の気負った会話が思い出されたのだ。

「家内です」と、頬も顎も二重にたれ下るように太った六十近い家主のHさんに向つて、美代子を紹介するのにしゃっちょこばつて言ったのが、急にキャッといいたくなるような恥しさとともに思い出された。それは十八歳の僕が考えたすえに実行した珍妙な挨拶だつ

たのだ。

僕達はこの同じ町名の中を二度引越した。

最初のアパートで一年近く過すうち、たちまち生活に窮してしまった。一年目にHさんが見兼ねてもう一つのアパートの管理人として住むように言ってくれ、二番目のアパートに移った。それから又ほぼ一年して、そのアパートが売れ、三番目のアパートに移らなくてはならなくなった。たしかHさんにはいつもぶらぶらしている娘さんがおり店でも持たせるためだったと思う。その替る都度、Hさんは一文なしの僕達の家賃を安くしてくれた。引越しの費用を出してくれたり、おまけに質に入っていた美代子のミシンを請け出してくれたりした。

最初の一年は夢のようにすぎた、としか言いようがない。

だいたい世間の夫婦は、最初の一年をどのように過すのだろう。僕達の部屋の向いに住む青木さんという共稼ぎ夫婦は其後奥さんが新宿のバーにつとめていることがわかった。夫の方は信用金庫の支店に勤めているという。僕は、胃弱だといっていつも腹巻をしている小柄な青木氏と会う度に、こちらがいていねいに挨拶するのに引きかえ、いやに胸を張って怒ったような顔つきになるな、と思った。僕の母親は銀行とか生命保険会社とかの堅い

職業を理想としていて、あこがれをもって僕に語っていた。大学の文学部に進んだ僕のことを非難するのが目的だったろうがそれがあまりあからさまなので僕は反撥した。

「お母さんの自由にはなりませんよ、僕は」とムキになって言い合いをしたことがある。

しかし僕は青木夫婦のいわば不安定な仲を羨しく思わずにはいられなかった。よく喧嘩するのは、だいたい青木氏の方が子供のような嫉妬心をもっているからで、相当乱暴を働くようだ。奥さんが目の下に青痣をつくって炊事の仕事をしているのに出会ったこともある。しかし四畳半で茶箆筥や洋服箆筥をぎっしりいれて、尚かつ、どすどす響くくらい大暴れするのをきくと、あの女性的な旦那は一体どんな喧嘩の仕方をするのだろう、とびっくりした。奥さんは二十四五、旦那さんは三十四五ときくと、僕にはこの明瞭に大人の男女から、自分の年齢からは想像つかない、ねっとりした体臭が感じられた。それに較べればたしかに僕達の方がはるかに危しかった。それは、小さな曳航船が大きな船をひいていくような危かしさなのだ。おれの方が美代子を引きずっているようだ、と僕は思った。

昭和二十九年の春、友人の月岡と一緒に受けたK大学には当然受かるはずの月岡が落ちて反対に僕の方が受かってしまった。僕は受験が近づいても美代子と会ったりして殆ど家

に寄りつかない生活をしており、家からせしめた受験料をおかた使ってしまったりして、たった一つだけ受けることにしたK大の文学部に落ちたらそのままどうにでもなれというつもりだった。

一年ぐらいどこかで働いてみよう、と僕は漠然と思ったりした。といっても綿密な計画をたててのことではない。僕にとっては、若さが正義のように思われていたのに過ぎない。しかし実際に浪人して落胆した月岡と喋っていると、自分の内部に生真面目な決意と、前途についてのやや虚無的な考えがごく自然にわいてきた。

「とにかく家を出ようと計画していたんだ」と僕は発表を見に行った帰り道、目黒駅にちかい陸橋の上で説明した。ポカポカした陸橋では、つい数箇月前まで破防法反対のビラがまかれたりしていた街の様相までが、季節とともに押しながされてしまったように思われた。

「うん」

月岡は曖昧に、ほっそりした顔を重々しく頷かせた。

家出については確かに幾つでも理由をつけられる。高校時代にさかんに学生運動をやった僕等はずっとブルジョワ家庭のものが多し。月岡も僕も食うに困っていたわけではない。しかし一様に家庭ざらいだった。家庭から離れられないでいるのは、金銭的なつなが

りがあるからだ、と思いこんでいたとしても不思議はない。

大学に受かったのも偶然だが、前の年から美代子を知るようになったのも偶然だった。ふつうの女ならそんなことになるはずがありませんよ、などという母の託宣は、ヒステリックな母ぶりをそのままあらわしていた。美代子は田舎から出てきて水商売をしている伯母と一緒に住んでいて、目黒駅近くの洋裁学校に通うかたわら、あまり伯母にとやかく言われるのがイヤさに夜は喫茶店に勤めていた。僕に言わせれば彼女は素朴で打算などもち合わせなかったからこそ僕についできたのだ。

それから偶然といえど見ず知らずの町にアパートを借りることになったのもそうだ。：僕兄には弟の考えでいることへのやじ馬根性と、戦後すぐ遠い旧制中学に通うために下宿生活をした際の経験があり、家出をする弟の部屋をさがしてやるという世智に長けたところを見せた。兄がどうして弟のためにこの辺を選んだのかは知らない。周旋屋に向って、風呂が近いか、とか、西向きの窓があるから家賃は安いはずだとか、いろいろなことを言っているのを聞くと僕は偶然の積み重ねがはずみをつけてくるのを感じた。しかし兄弟がまるで共謀したかのようなので、憤懣やるかたない父が、自分のことは自分で始末をつける、と言い放ち、どうせ信二には独立などできっこないと踏んでいると聞くと僕は二度と父の家には行けないかもしれないと思った。

勿論、それだけが、父の本心ではなく、父の気持というよりはむしろ論理の帰結という代物だったろう。其後、高校時代の先生のところへ家庭教師の口を頼みに行ったところ、

「いつか君のお父さんが見えられてねえ」

と言って気まずいような笑いを浮かべた。その瞬間僕は父の心配のスタイルがわかった。悪くいえばそれは「重役スタイル」の心配の仕方だった。それにしても父は水臭い、と僕は思った。もしこの先生にお金を借りれば父のところへ請求が行くのではないか、と氣を廻した程だ。まだ独身だという気楽な暮らしのその先生の顔が、まぶしかった。

そしてその先生の迷惑そうな顔に出喰わしたとき、それまで自分の見落していた「他人の顔」が急に怖くなった。ふつうの生活をしている他人の顔を。

最初のアパートを借りて間もなく友達が大量して遊びに來た。月岡をはじめ皆高校時代からの仲間だった。

僕は食事を振る舞うのに浮きうきしていた。そうした新婚家庭に起るようなことはどれもママゴトだったのだろうか。

そういえば美代子も子供じみた習慣を持っていた。彼女は朝いちばん先にいれる茶の入った湯飲みをまず部屋の隅っこの高い所にそっと置く。不思議に思つて訊くと、「死んだ

おかあさんのぶんよ、これは」と真面目くさって言った。

ともかく、皆は美代子という一匹の動物を眺めるためにように神妙に坐りながら落着かない様子だった。

それから誰が言い出したのか、この辺は少し歩けばまだ田圃があるから、芹摘みに出かけようということになった。

「芹のお浸などはいいですね、一杯やるのに」

藤井という、一年先輩だが浪人したので僕達と同学年になる男が言った。彼は年上の女性と交渉があるというもっぱらの噂で、僕の部屋などでも物腰が一番大人っぽかった。

僕達が酒などを買ひ込みかたがた惣菜になる芹を採ってくるつもりでアパートを出て行くとき、食事の用意をしていた美代子が僕をよびとめた。

「ちょっと……」

美代子は子供っぽいカスリの着物に黄色い帯という皆からみてひどく可憐な恰好だったが、顔は怒ったように緊張していた。

「こんなに大勢呼んだりして、困るのよ、お皿も何も用意できないわ」

彼女には付き合いを大事にする田舎風のところがあって、そう言ったのだ、と僕は思った。「でもいいじゃないか、気にしないで」